高円宮妃久子殿下
＋
柳生 博

日本野鳥の会 会長

特別対談

2014年
9月5日、
東京赤坂御用地内・
高円宮邸にて

野鳥の魅力を語る

高円宮妃久子殿下は、
鳥類やその生息地の保全に
取り組んでいる
「バードライフ・インターナショナル」の
名誉総裁でいらっしゃいます。
柳生博会長が、
野鳥の魅力や
自然保護のこれからについて
うかがいました。

撮影＝佐藤信敏 *Nobutoshi Sato*
構成＝奈落一騎 *Ikki Naraku*

バードライフ・インターナショナルの使命

柳生博会長（以下、柳生）　妃殿下は、鳥類や自然の保護を目的とする国際組織「バードライフ・インターナショナル（以下、バードライフ）」の名誉総裁を務めていらっしゃいます。日本野鳥の会もバードライフのパートナー団体ですが、現在、バードライフのパートナー組織は120か国にあるそうですね。

高円宮妃久子殿下（以下、妃殿下）　はい。総会員数は、約277万人です。バードライフは、その国で支部を立ち上げることは少なく、その地でずっと活動しておられる民間団体にパートナーとして入っていただいています。地域によって事情も異なりますし、外から入ってきた団体や人が活動すると無理が出ますから、理にかなった活動展開であると思います。きわめて現場重視というのが、バードライフの大きな特徴です。

柳生　名誉総裁として、お役目が多くて大変ではありませんか？

妃殿下　そもそも鳥が好きでしたので、バードウォッチングをする口実になるのでは……などと考えたりして（笑）。名誉総裁になってからは、国内外に関わらず公務が始まる前の朝の時間帯を、可能であればバードウォッチングにあてています。

柳生　私は妃殿下の撮られた鳥の写真集（『寄り鳥　見鳥』産経新聞出版）を持ってきたのですが、シマフクロウの写真が素晴らしいですね。大きな目がしっかりこちらを向いていて、しかもフォーカスがみごとに合っています。

妃殿下　この写真を撮ったときは周囲が真っ暗でしたが、「いま絶対、目が写った」という確信がありました。

柳生　妃殿下との間に、何か通じ合うものがあったのでしょう。妃殿下の写真を見ていると、自然に対する感性のようなものを感じます。子どもの頃はどんな環境で過ごされたのですか？

妃殿下　私の実家は東京なのですが、都会ながら緑の豊かな環境でした。自宅の庭にも実のなる木がたくさん植わっていましたから、昆虫や野鳥は子どもの頃から身近なものでした。一人っ子でしたから、庭に出て何かをじっと観察するのが日課で、昆虫や鳥の羽根などをよく標本にしていました。

妃殿下が撮影された野鳥写真

シマフクロウ（北海道知床半島）

イソヒヨドリ（島根県日御崎）

野生生物の習性を知り、尊重する

柳生　いまのお話からも、子ども時代の自然体験がその後の感性を育てるうえで非常に重要なことがわかります。しかし最近は、家の玄関にツバメが巣を作ると、不潔だからといって親が叩き落としてしまうという報告も多いのです。

妃殿下　まあ、そんなことがあるのですか。

柳生　ええ。3週間も経てばヒナは巣立っていくのですが、それが待てずに落としてしまうというのです。子どもの見ている前で落とすこともあるようですから、子どもの心にどのような影響を与えるのかが心配です。

妃殿下　幼稚園から小学校ぐらいにかけての子どもは、どんなものにも興味を持っています。その興味の芽を摘まないで、虫や動物を怖いものだと思わないように育てていくことが、親や周囲の大人の務めだと思います。

一方で、野生の生きものに対して「かわいいかわいい」とペットのように接する感覚には注意が必要ですね。ほかの生命体にも人間と同じように生きる権利があって、その命も尊重しなければなりませんが、その考え方を子どもたちの中に正しく自然に育てていくのは、私たち大人の責任ではないでしょうか。

柳生　そのためには、生きものの習性や生態を知ることは大事ですね。

妃殿下　生きものの習性を知っていくと、鳥であれば鳥の気持ちがだんだんとわかってくるようになります。昆虫採集が好きな子どもは、その虫がどう動くか、どんな生態なのかについてもくわしくなりますよね。「命は大切に。虫取りもいけない」という風潮もありますが、生きものに触れる機会が失われてしまっては本末転倒です。

柳生　ある昆虫学者が言っていました。子どもがどんなに昆虫採集をしようが、それで昆虫が減びることはないよと。

妃殿下　私は女性動物学者のジェーン・グドールを尊敬しているのですが、彼女のお母様がすごい方なんです。ジェーンが子どもの頃、ミミズを連れてベッドに入った時に、お母様が「きたないから外に捨ててきなさい」ではなくて、「ここに置いていたらミミズが死んでしまうから、ミミズが住んでいるところに持って帰ってあげなさい」と彼女に教えたという話があります。

身近な変化にひそむ怖さ

柳生　最近はスズメやツバメといった身近な鳥もだんだん少なくなってきています。

バードライフではそうした普通種の保全にも取り組まれていますね。当会でもこれまで、タンチョウやシマフクロウといった絶滅危惧種を保護してきましたが、「普通種も減っている」という現状を知ってもらうために、2012年度からツバメの目撃情報を募集するキャンペーンを行なっています。

妃殿下　ツバメが巣をかけられる軒下が減っているといった住環境の変化もあるのでしょうが、一番怖いのは目に見えていない影響だと思うのです。

例えば、人や作物には無害だという農薬や殺虫剤でも、土壌の微生物やプランクトンへの影響までは未調査なわけです。そういった未知の要因が、種の減少に関わっている可能性があるということは恐ろしいことですね。減少の原因をさまざまな観点から調査することは、とても大事だと思います。

柳生　野鳥には国境はありません。日本だけを見ていても、またまその年渡ってくる数が少なかっただけということもありますからね。地球全体で見れば、危機的状況にはないという場合もあるでしょう。

妃殿下　バードライフが果たす役割として、普通種、希少種にかかわらず、その鳥の置かれている状況を世界規模で相対的に把握するということがとても大事だと思います。

シロハラチビハチドリ（コロンビア）

高円宮妃久子殿下
香川県の旧家、鳥取滋治郎氏の長女としてご誕生。10代で父親の転勤のため渡英。ケンブリッジ大学ガートン・カレッジで中国学や人類学・考古学を学ぶ。84年、高円宮憲仁親王殿下とご結婚。日本赤十字社名誉副総裁、日本サッカー協会名誉総裁などの要職を多数務めていらっしゃる。

バードカービングやガラス細工など、鳥の美術品をコレクションするのが趣味という妃殿下

対談の全容は、野鳥誌1月号に掲載されます。お読みになりたい方にはプレゼントしますので、22ページのアンケートをお送りください。

日本野鳥の会に期待すること

柳生　日本野鳥の会は今年で創立80周年を迎えました。会に期待する役割などあれば、お聞かせください。

妃殿下　おめでとうございます。鳥類保護というのは、1か国だけで成し得ることではありません。バードライフのパートナーシップのもと、日本野鳥の会をはじめ、各国がともに連携をはかっていくことが、今後ますます重要になってくるでしょう。

柳生　2004年からはバードライフと協働して、海域の重要野鳥生息地を保全する「マリーンIBA」事業を進めています。現在、その選定作業がほぼ終了して、来年あたりには白書としてまとめられるようです。

妃殿下　環境保護では、先手を打って行動することが肝心です。絶滅しかけたものを回復させるのは容易ではありませんが、早い時点で科学的なデータを出して行政にアピールし、未然に防げれば一番良いでしょう。

柳生　参照した調査データの数々は、当会に90支部ある全国の会員さんの協力があって集められたものでした。

妃殿下　バードウォッチングは、老若男女さまざまな人が楽しんでいて、その間口の広さは環境保全のためには非常に重要です。子どもたちの育成という点でも、間口が広いからこそ、幅広い世代の人と一緒に、バードウォッチングをしながら経験を積んで行くことができる。そういう中で子どもたちが、鳥が生活をしている環境や生態系というものに興味を持っていく。それが環境保全には欠かせないものだと思うのです。

柳生　その通りですね。

妃殿下　日本野鳥の会は、そもそも鳥が好き、自然が好き、という方々の集まりです。好きな者同士が作り出すエネルギーは、1+1が2ではなく、3にも4にもなっていくでしょう。その発信力も強いものですし、皆さんの経験と専門知識に基づいてできることを精いっぱいなさることで、物事を大きく変えていくことができると思います。バードライフの良きパートナーとして、今後もともに活動をしていければうれしいですね。

柳生　ありがとうございます。